PLAYERS' TALK NO.1

エンターテイナーの条件
What it Takes to Be an Entertainer

武井 壮 × 三浦大知

百獣の王　ミュージシャン

SO TAKEI × DAICHI MIURA
KING OF BEASTS　MUSICIAN

P.1

TOKYO PAPER for Culture

トーキョーペーパー
フォー　カルチャー

第十三号 2016 Summer THIRTEENTH ISSUE
平成28年7月27日発行
013

リオデジャネイロ2016オリンピック・パラリンピックが目前に迫り、2020年の東京にもどんな風景が広がっていくのか、今からどきどきする。言語を越えて、世界共通の感動をダイナミックに喚起するスポーツは、人生の様々なシーンにも置き換えられ、生きることの喜びや楽しさを運んでくれる文化にもつながっている。真剣勝負の瞬間。失敗への恐れも勇気に変えて躍動するスポーツマインドを見習って、TOKYO PAPER for Cultureは、より軽やかに、よりアクティブに、東京の文化を探求していきます。

With the Rio de Janeiro 2016 Olympic and Paralympic Games nearly upon us, it's exciting to start imagining the kind of scenes that will play out in Tokyo in 2020. Sport transcends language, its dynamism arousing emotions shared around the world. Offering parallels to many situations in our lives, sport is a part of culture that reminds us how much fun and joy there is to living. Competing for real. Learning from a sports mindset that energetically transforms fear of failure into courage, TOKYO PAPER for Culture will continue to delve into Tokyo culture, staying active and light on its feet.

ARTS COUNCIL TOKYO

私のお気に入りプレー

My Odd Plays and Fine Plays

大橋裕之 HIROYUKI OHASHI

P.8

東京新陳代謝

Tokyo Transitions

絵・文
ほしよりこ

Text and Illustration by
Yoriko Hoshi

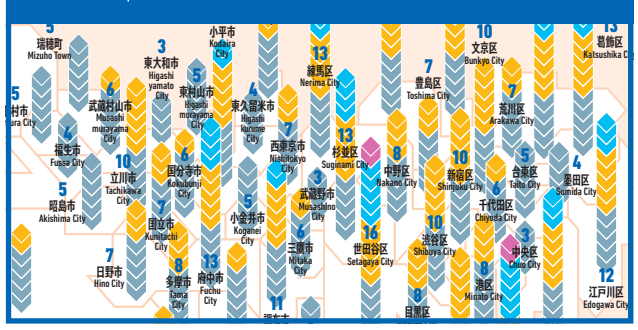
P.8

東京記録

TOKYO RECORDS

RECORD NO. 001　公立図書館 Public libraries

P.5



アーツカウンシル東京トレーニング

ARTS COUNCIL TOKYO TRAINING

アンサンブルズ東京ほか
Ensembles Tokyo and more...

P.6

PLAYERS' TALK NO.1

エンターテイナーの条件
What it Takes to Be an Entertainer

武井 壮 × 三浦大知

百獣の王　ミュージシャン

SO TAKEI × DAICHI MIURA
KING OF BEASTS　MUSICIAN

東京の文化を支える表現者たちの心意気を、スポーツのマインドで垣間見る巻頭対談“プレイヤーズトーク”。第一回目は武井壮さんと三浦大知さんを迎えて、それぞれの舞台での真剣勝負について話を伺いました。

Players' Talk — an opening interview that reveals through glimpses of a sporting mindset the spirit of expressive people who support the culture of Tokyo. For this first installment we welcome So Takei and Daichi Miura to talk about how each competes on his own stage.

三浦：僕が武井さんを知ったきっかけはバラエティ番組です。その番組で武井さん、いろんな種類の動物の倒し方を披露していました。それがもう、最高におもしろくて、大笑いして。

武井：百獣の王だからね。

三浦：（笑）。以来、武井さんのことが気になって、インターネットで調べたり、武井さんの記事を読んだりしているうちに、もともと陸上競技・十種競技の元日本チャンピオンだったと知ってびっくりして。なかでも僕が一番驚いたのは、自己分析の徹底ぶりです。記事か何かで読んだんですけど、「毎日自己ベストを出すために、毎日自分のデータを記録していた」っていうような話をされていて。

武井：そうそう、ひたすら自分のデータを取っていました。小さい頃からよく動く子供で身体を動かすのが得意だったから、これなら将来、自分はスポーツという道で成功できるんじゃないか？って淡い希望を抱いてて。スポーツは頭で思ったことを思い通りできれば、絶対に成功するわけだから、その能力を鍛えれば道は開ける。そう思ったんだよね。

三浦：そう確信したのはいつですか？

武井：小学生の頃。それからは自己分析の毎日で。

三浦：小学生でそんなふうに考えられるっていうのが、もうすごいです。

武井：いや全然すごくもなんともなくて、得意のスポーツをギャンブルにしないで、ちゃんと自分の人生の柱にするために何が必要か？　それを考えた結果が、本番でも練習でも調子の良い状態を常に保つ、つまり調子の悪い日をゼロにすることだった。それで高校生の頃から6年間、自分の身体のデータを取り続けてみたんです。

三浦：6年間も！

武井：そう、1日6回部屋の中と外の気温と湿度、身体の挟める部分全部の体温、そして自分が着ている服の素材まで細かくデータを取って、毎回50m走のタイムを計って体調を記録するの。そうすると自分をどの状態に置いたら調子が良くなるのか、悪くなるのかがおもしろいほどわかるから、それをもとに体調をコントロールすると本当にほぼ毎日自分は絶好調（笑）。

三浦：自分のバイオリズムがわかってくるんです

ね。そうやってまず自分で問いを立てて、その答えをちゃんと持てるということがすごいです。普通はなかなか答えにたどり着けないです。

武井：答えはね、必ずあるんですよ。ただその答えは全員に等しく当てはまる答えではなくて、あくまで僕の身体に対する答えです。で、いまだにそのときの感覚が僕の頭と皮膚の中にフィーリングで残っているから、もし体調が悪くなってもそのとき習得したいろんな対処法でリカバーします。僕、その引き出しの多さだけはマジで世界一だと思ってる。ある意味で変態だよね（笑）。

三浦：それは……、変態ですね（笑）。僕、最近思うのが、インターネットが欠かせない時代でSNSも普及して、それによって他人の評価がそのままなりたい自分の姿にすり替わっている瞬間がすごく増えているような感覚があるんです。まるで他人が作った鏡に映る自分が本当の自分だと思い込んでしまっているような、そういうなかで自分自身とちゃんと向き合うことってどんどん難しくなっているのかなあって。自分がどう動いたら一番気持ち良いか、どういう気持ちで臨めば理想の動きができるのか、自分は今、何が一番したいのか。本当に大切なことは、まず自分の頭で考え抜いて、自分を自己分析することなのに。だからそれをブレずにずっと実践している武井さんに、僕はすごく刺激を受けているんです。

武井：大知くんのような違った分野で活躍する人に、少しでも役立っているのなら、それはすごくうれしいなあ。

三浦：だから僕も武井さんのように調子が悪い状態をできるだけなくしたいというのが前提にあって、その一環として例えばステージに立つ前に何か特別なことは一切しないようにしています。ステージが成功するように願掛けとかもしないですし、これがないとダメとか、そういう状態を作らないようにしていて。自分のステージを周囲のものに絶対に左右されたくないんです。

武井：外的要因が違っても、自分のパフォーマンスは常に一定の状態に高められるように普段からしているということだよね。

三浦：そうですね。

武井：それって言い換えると縦に記録を伸ばすんじゃなくて、横幅や奥行きを自分に持たせているということでもあるよね。

三浦：そういうことになるんですかね。僕、歌もダンスも大事ですけど、最終的には観てくれる方にはエンターテインメントを感じてもらいたいという意識が強いんです。観てくれる方の気持ちに触れて、それで少しでもその方の人生が豊かになってくれたら……、それがすべてだから、自分の歌やダンス単独では、満足したことがないんです。

武井：じゃあ得意なものを伸ばすと言うよりも、弱点を克服しようとする感覚はある？

三浦：はい、できることを少しでも増やしていきたいなって。

武井：そうやって自分の武器を増やしているんだね。でもその大知くんの考え方、僕の走り高跳びの練習にすごく似ていると思った。例えば走り高跳びの選手に10の筋力があるとして、その10の筋力で跳べる高さを最高の技術で跳ぶと、最高の記録が出るわけでしょう。でもそこで急に強風が吹いて背中を押されるといった外的要因が発生したら……。

三浦：バランスが崩れてバーが身体に当たってファールになります。

武井：そう、高く磨いた技術っていうのは縦に高いけど横幅がすごく小さいから、失敗のリスクも同時に高まる。これがね、僕はつまらないなあと思ったんです。つまり僕の可能性を、横幅を狭めてく作業だと。実はこれはスポーツ全般に言えることだと思っていて、アスリートというのはみんな自分にしかできない技術を磨き上げたスペシャリストなんですよ。もちろんそれはとても素晴らしいことだけれども、僕にとっては不安でもあるわけです。なぜならその技術が少しでも横にずれたら、素人になるわけだから。それが僕にとってはスポーツにある一番のリスクだと思っていて。だから僕が走り高跳びをするときに練習するのは「バーに触れずに越える」ことだけを鍛えるっていう。毎回違う場所から助走して、毎回違うとこから踏み切って、毎回違う跳び方でバーを越えるというトレーニングをするんです。走り高跳びの真理はひとつ、バーに触れずに越えれば成功だから。

三浦：自分の思った通りに飛ぶ。さっき武井さんがおっしゃっていたスポーツの本質ですね。

武井：そうそう。例えば水を飲むとき、何も頭でイメージしなくても水は飲めるでしょう。それは行為であって日常なんだよね。でも水を「こ

Taking a drink of water is an everyday act.
But if you can drink it exactly
the way you want to,
you've entered the world of sport.

—SO TAKEI

水をただ飲むことは、行為であり日常。でも自分の思い通りに飲むことができたら、それはスポーツです。

武井壮

Miura: I first learned about you when you appeared on a variety show I was watching. You were explaining how to bring down all different sorts of animals and it was so hilarious it had me in stitches.

Takei: Well, I am the King of Beasts.

Miura: (Laughs) That got me started thinking about you a lot and as I checked the Internet and started reading articles I was shocked to learn that you'd started out as the national champion in decathlon. But what really surprised me was how dedicated you are to self-analysis. I read in an article somewhere that you kept a daily record of all kinds of data so that you could try to mark a new personal best every day.

Takei: That's right, I kept careful records. I've been active ever since I was a little kid and was pretty good at moving my body, so I had this idea that one day I might be successful in sports. I figured the key to success in sports was to be able to execute things exactly as I saw them in my head, and if I could cultivate the ability to do that then a path was sure to open up.

Miura: When did you decide that?

Takei: When I was in elementary school. From that point on, it was self-analysis every day.

Miura: That's pretty incredible for a kid still in elementary school, isn't it?

Takei: Not at all. I was good at sports but I wanted to figure out how to turn sports into the real mainstay of my life, rather than just taking a gamble. After thinking about it I decided the key was to maintain top condition at all times, whether in competition or in training — to eliminate bad days. Starting in high school, then, I kept track of data on my own body for a solid six years.

Miura: Six whole years!

Takei: That's right. I kept track of all sorts of fine-grained data — the inside and outside temperature and humidity six times a day, my body temperature everywhere I could hold a thermometer, even the materials my clothes were

うして飲む」という頭からの指令を出して飲むのであれば、それはスポーツ。「こうしたい」がそうできることが、スポーツの原始的な在り方であって真理なんです。

魔法使いになるために

武井：僕は大知くんのようなエンターテイナーに対して、最大限のリスペクトを持っています。だって自分という個体ひとつで、観ている人々に魔法をかけているんだから。大知くんは魔法使いですよ。大知くんが呪文を唱えたら、みんな泣いたり感動したり楽しんだりするんだから。そして僕はそれを観たときに「自分はあの魔法、持ってない」って思ったんです。

三浦：えっなぜ武井さんは魔法を持っていないことになるんですか？

武井：例えば十種競技で優勝しても誰も笑顔にはできなかったから。僕が積み重ねてきたスポーツの能力にはそんな魔法はなかったんです。それに気づいたら、魔法が使える人たちが心から羨ましくなって。アーティスト、芸人、タレント、俳優……、エンターテイナーは高さだけの勝負じゃなくて横幅や奥行きもあって、しかも人を幸せにするという、僕にとってそれは完成形です。もちろんスポーツもエンターテインメントだけど、僕はそのスポーツではエンターテイナーになれなかったから、だったらエンターテイナーになった上でスポーツをやってみようと。それでこの道に入りました。大知くんは、そもそもなぜ歌って踊ろうと思ったの？

三浦：僕の場合、やっぱり子供の頃に出会ったマイケル・ジャクソンの存在が大きいですね。なかでも僕が一番好きなのが、マイケルのミュージックビデオ『Black or White』です。映像ではいろんな国の民族が登場するんですけど、国ごとにセットチェンジされていくなかで、マイケルはその国の民族と民族ダンスを一緒に踊るんですね。それを当時観た僕は子供ながらに「この人はどこで何をやってもマイケルなんだろうな」って強烈に感じて。どこへ行ってもその場所の色に染まることなく、むしろ取り入れながらもすべてオリジナルにしているマイケルがすごくカッコ良かったし、同時に羨ましくなって、僕もマイケルのようになりたいって思ったんです。それが歌って踊ろうと思った原点なんですけど、だからといって自分がマイケルと同じ山の頂上を目指そうとしても、それはきっとできないなって。でも、もしもマイケルに登ってない山があって、僕がその山を自分なりに登ることができたら……、もしかすると“オリジナル”という意味ではマイケルに近づけるかなって、そう信じながらこれまで活動してきました。

武井：“マウント大知”だ。そうだね、美しい山はチョモランマだけじゃないし、山は一番高いから美しいとは限らないから。そんな大知くんは、自分を表現する上で歌とダンスはどういう捉え方をしてるの？

三浦：僕にとってダンスは歌の世界観を伝えるためのアクティングだと思っているところがあって。だから例えばダンスしない方が絶対に伝わると思ったときには、ダンスを取り入れません。でもそのダンスをしないという選択もまた、自分にとっては一番のダンス的表現だと思っているんです。

武井：それはおもしろいなあ。今の話を聞いていて思ったんだけど、僕は何かをやるときに、その肩書きの人にならないようにしているんです。最初に全部肩書きを行動の言葉に変換して考えていて。たとえ「歌手」と名乗っても誰一人その歌を聴いていなければ、歌手とは言えないでしょう。「歌手」はただの単語でしかない。だから僕にとって「歌手」とは、「歌を歌うことで人が感動する人」になる。その行為、活動のほうが、すごく大事。いつもそうやって考えています。

三浦：武井さんのそうやって物事の本質を見極

PLAYERS' TALK NO.1

エンターテイナーの条件
What it Takes to Be an Entertainer

made of — and recorded my condition and time whenever I ran the 50 meters. That made it easy to see the conditions under which I performed well or poorly, and then I could make adjustments to maintain my condition. In no time at all I was in top form just about every day. (Laughs)

Miura: So you figured out your own biorhythm, right? I think it's amazing that you posed a problem and then managed to find the answer all by yourself. A lot of times people just never find an answer.

Takei: There's always an answer. But this wasn't an answer that would work for everyone in the same way; it was just the answer that worked for my body. I can still feel what it was like then in my mind and in my skin, so now even if I get sick I can use the techniques I acquired then to aid my recovery. I figure I've probably got more tools in my toolbox than anybody else in the world. It's kind of freaky, really. (Laughs)

Miura: That is kind of...freaky. You know, lately I've been thinking a lot about how indispensible the Internet has become, and about the popularity of social media, and how easy it is to let the way other people evaluate you become a substitute for who you really want to become. It's like looking into a mirror that somebody else has made and believing that the reflection it shows is the real you, and then it gets harder and harder to face yourself square on. How do I need to move to feel my best? How do I need to feel to enable myself to move optimally? What do I want to do most of all right now? The critical thing is to think things though carefully in my own head, to analyze myself on my own. So it's been really inspiring to see how you've been able to hold steady in putting that sort of thing into practice for so long.

Takei: I'm really glad to hear I've made a little bit of a difference to someone like you who's working in a totally different field.

Miura: I've decided, like you did, to try as much as possible to eliminate bad days, and part of that is not doing anything special before going on stage. I don't have any "lucky routine" I feel I have to do to make a show a success, and I try to avoid setting things up in a way where anything absolutely has to be "just right" in order to work. I don't want the quality of my performance to be swayed by anything peripheral.

Takei: So you're always working to ensure you can maintain a constant high level of performance regardless of differences in outside factors?

Miura: That's right.

Takei: To put it another way, then, instead of just trying to extend your height, you're working to extend your breadth and depth, right?

Miura: I guess so. Song and dance are important to me, but I'm acutely conscious of wanting those who watch me to feel entertained in the end. I want to get in touch with the audience's feelings, and I hope what I do makes their lives just a little bit richer. That's the most important thing so I've never been satisfied with just my singing or dancing on its own.

Takei: So you're not so much seeking to stretch what you're good at as to conquer your weak points?

Miura: Right. I want to be able to maximize the number of things I can do well.

Takei: So you're filling up your own toolbox, then. What you're describing reminds me a lot of the way I practiced for the high jump. Let's say a high jumper has muscle strength of 10. If he could reach the highest height possible using all 10, and do so with the best possible technique, he'd mark the best possible record, right? But if outside factors come into play, like a strong gust of wind that catches him from behind....

Miura: Then he might lose his balance, hit the bar, and foul out.

Takei: Right. So as you refine your technique for height alone, you lose breadth and your risk of failure grows, too. I didn't like this at all. I felt it would narrow my potential. I think this holds for sports generally, but athletes are specialists who have refined their own technique in ways nobody else can imitate. This is awesome in its way, of course, but it made me nervous. The reason being that if anything interferes with the technique you end up performing like an amateur. I thought this was the biggest risk in sport. So when I practiced the high jump, I worked exclusively on clearing the height without touching the bar. When I was training, I would start my approach from a different location, take off in a different place, and try clearing the bar in a different way every time. I figured there was only one truth about the high jump: you succeed if you clear the height without touching the bar.

Miura: Jumping the way you want to jump, that's the essence of sports that you were talking about earlier, isn't it?

Takei: Right. It's like drinking water. You can drink water without having any particular image in your head; it's just something you do as part of your everyday life. But if you send a directive from your brain to "drink like this," then suddenly you've entered the world of sport. Wanting to do something and then finding a way to do it is the primitive, true nature of sport.

On Becoming a Magician

Takei: I have a lot of respect for entertainers like you, Daichi. All by yourself you cast a spell over your audience. You're a magician! You do your magic and everyone cries, or feels moved, or has fun. When I see this it makes me realize that that's something I just don't have.

Miura: What do you mean you don't have magic?

Takei: For example, even when I won the decathlon it didn't put a smile on anybody's face. The sports ability I'd cultivated just didn't have that kind of magic. When I realized this, it made me feel envious of those who *can* use magic: artists, performers, celebrities, and actors. Entertainers play on a field that demands more than just height; they have to have breadth and depth, too, and they make people happy. That's something I didn't have. Sure, sports are a kind of entertainment but I was never able to become an entertainer *in* the world of sports so I decided to become an entertainer who works *with* sports. That's how I ended up doing what I do now. What got you started singing and dancing, Daichi?

Miura: For me I suppose discovering Michael Jackson when I was a kid had a lot to do with it. I especially liked his music video for *Black or White*. All sorts of different ethnicities make an appearance, and as the set changes from country to country Michael joins in with them as they perform ethic dances. I was just a kid when I saw it but it left a huge impression, like, "Wow, Michael's Michael wherever he goes and whatever he does." No matter where he went he didn't get lost in the local color but instead adapted it to create something original; I thought he was so cool, and I was so envious, and I wanted to

僕はなぜ歌って踊るのか？その本質にたどり着きたいっていつも思っています。

——三浦大知

めていくところに、僕はすごく刺激を受けているんだなあって、今、話を聞きながら改めて思いました。なぜ歌って踊るのか？　僕自身、その本質にたどり着きたいっていつも思っているから。そして最終的には歌手でもなくダンサーでもないジャンル、三浦大知になりたいんです。

武井：僕も肩書きは百獣の王だけど、職業は武井壮。意外なところに共通点があったね。なんだかまだ見えぬゴールに向かって草がぼうぼうに生えているところを「うおー！」って言いながら必死に走っていたら、隣で大知くんも走っているような気がしました。「お、大知もおるやないか」みたいな（笑）。

三浦：武井さんと一緒に走れるなんて、うれしすぎます！

武井：それもここ、東京で走る。僕はこれまで世界中のいろんな街に行ったけど、東京が一番素敵な街だなって、本当に思っているんです。僕の生まれ育ったこの街は、24時間、人がアクティブに楽しめてどんなことでも仕事になる魔法の国。こんな街、世界中探しても見つからない。

三浦：それは本当にそう思います。僕自身、東京から音楽を発信していく意志がすごくあって。もっと言うと、僕は日本語が大好きなんです。日本語の歌が世界にもっと届いてほしいから、それは常に意識しているんです。

武井：うん、最高級のものがそろっているのに、でもその割に東京は「最高に楽しいよ」っていう人の熱は感じにくい街でもあるよね。それは僕、しようがないと思っています。この街のすべてを知ることはすごい労力が必要だし、それこそたくさんの能力と知識がないとすべては楽しめない街でもあるから。だからこそ僕が言いたいのは、ひとつの世界、ひとつの分野に絞って高さ勝負だけで楽しみを得ようとするのはもったいないよっていうこと。横幅と奥行きもあるから、東京という街を360度全方位に楽しむ能力を毎日ちょっとずつでもいいから自分を成長させながら身につけてほしい。そして4年後、ここ東京にはオリンピックという世界最高のスポーツの祭典、エンターテインメントの祭典がやってくるわけだから、それを人生最高に楽しめる自分で迎えてほしいなって本当に思います。僕自身、野球のボールを140キロで投げる練習をしたり、ピアノを練習したり、さらに知らない知識や技術を毎日身に付けようとしてるから。

三浦：僕も、それまで「あいつまた変なことやっているな」って観てくれる人におもしろがってもらえるように頑張ります。

武井：「もういいや」って、その走りを途中で止めてしまう人もいっぱいいるけれど、大知くんは走り続けるね。僕も負けないように走るよ！

三浦：僕、スピードでは十分負けますから（笑）。

Why do I sing and dance? Because I'm constantly thinking about how to explore their essence.

——DAICHI MIURA

be like him. That's what got me started singing and dancing, though of course I knew I'd never be able to climb the same mountain Michael had even if I tried. On the other hand, if there were some other mountain, and if I climbed it my way, then just maybe, just maybe I could approach what Michael did, at least in terms of being an original. That's the belief that's kept me going.

Takei: Mt. Daichi, then! You're right, though. Mt. Everest isn't the only beautiful mountain out there, and just because a mountain's tall doesn't necessarily mean it's beautiful. How do you think about singing and dancing as ways of expressing yourself?

Miura: For me, I think of dancing as a kind of acting that conveys the world of the song. So if there were a song that would be best conveyed without dancing, I'd leave the dancing out. But the choice not to dance would be, for me, the ultimate dance-like expression.

Takei: That's really interesting. What you just said reminds me that whenever I try something new I make an effort to avoid becoming somebody reduced to a title. I start by replacing the title with a description of what someone with the title does. I could call myself a singer but if nobody ever heard me sing it wouldn't mean much, would it? "Singer" is just a word. So for me, a singer is someone who moves people by singing songs. The important thing is the action, the activity. That's how I like to think of things, anyway.

Miura: As we've been talking just now I'm reminded how inspiring it is to hear you talk about the way you look into the essence of things. Why do I sing and dance? Because I'm always trying to get at the essence of these two things, and because ultimately I don't want to be a singer or a dancer but Daichi Miura — a genre all my own.

Takei: My own title is the King of Beasts, but my occupation is So Takei. Who knew we'd have so much in common? It's like I was dashing through the long grass toward some unseen goal, gave a roar and looked beside me, and there you were, running too. Like, "Whoa, what's Daichi doing here?" (Laughs)

Miura: It'd make me crazy happy to run with you!

Takei: And we'd have to do it here in Tokyo. I've been to all sorts of cities all over the world but I think Tokyo's the best. I was born and raised here, but it's really a magic place where people can have fun and be active around the clock, and turn just about anything into a job. There's nowhere like it anywhere else in the world.

Miura: I think you're right. I consider myself someone who's conscious of creating music that's from Tokyo. I love the Japanese language, too, and I'm always trying to introduce more Japanese songs to the world.

Takei: Tokyo's got the finest of everything, and yet you don't hear a lot of people talk passionately about all that the city has to offer and how much fun it is. I'm not sure there's any good answer to that, though. It would take enormous effort to get a handle on everything in the city, and there's no way you could enjoy all of it without a lot of effort and a lot of knowledge. That's why what I'm trying to say is that it's a waste to try to enjoy yourself only by, say, competing to see who can go highest in one little world or one narrow field. There's tremendous breadth and depth, too, and I hope people will look all around Tokyo — 360 degrees around the city — experiment a little bit with different ways to enjoy themselves every day, and grow in the process. And then I really hope people will be ready to have the time of their lives in four years when the Olympics — the finest festival of sports and entertainment in the world — come to Tokyo. I've been practicing how to throw a baseball at 140 kilometers an hour, and how to play the piano — trying every day to master some new knowledge or skill.

Miura: I'll be working hard, too, trying to do something that will entertain even those people who until now have looked at what I was doing and said, "There he goes again, up to something weird."

Takei: A lot of people who run just say, "Ah, enough already" and throw in the towel halfway through, but I'm pretty sure you'll keep running. I hate to lose so I'll keep legging it, too!

Miura: I'm pretty sure you'll win if we're racing for speed! (Laughs)

武井 壮　So Takei

肩書き「百獣の王」。1973年東京生まれ。元陸上十種競技・日本チャンピオン。昨年秋にフランスで行われた世界マスターズ陸上では、4×100mリレーで金メダルを獲得。7月15日に、トップアスリートたちとの対談本『勝つ人〜13人のアスリートたち』（文藝春秋）を発売。
ツイッターアカウント　@sosotakei

Known as the "King of Beasts." Born in 1973 in Tokyo. Former decathlete and Japan national champion. Won a gold medal in the 4 x 100 relay at the World Masters Athletics Championships held in France last autumn. His collection of interviews with top athletes *Katsu hito: jusannin no asuritotachi* [People Who Win: 13 Athletes] (Bungeishunju) was published on 15 July. Twitter account @sosotakei.

三浦大知　Daichi Miura

ミュージシャン。1987年沖縄生まれ。Folderのメインボーカルとして1997年にデビュー。2005年3月にシングル『Keep It Goin' On』でソロデビュー。シンガーとして、コレオグラファやソングライティング、楽器までも操る。9月15日からはサンシティ越谷市民ホール 大ホールを皮切りに、全国ツアー「DAICHI MIURA LIVE TOUR 2016」が全国15か所 計17公演行われる。

Musician. Born in 1987 in Okinawa. Debuted in 1997 as the main vocalist for Folder. Served as solo singer for the March 2005 single, "Keep It Goin' On." Active as a singer, choreographer, and songwriter, he plays instruments, too. His 15-location, 17-show national tour, Daichi Miura Live Tour 2016, will kick off on 15 September with a performance in the large hall at Suncity Koshigaya Civic Hall.